**2023年6月3日（土）**

**研究発表＆シンポジウム「海を渡った日本人教師」**

**―『新世紀人文学論究』第7号刊行によせて―」開催報告**

**報告者：伊月知子（愛媛大学）**

当日は土屋洋大会委員長の司会によるオンライン開催とし、日本、中国、ベトナム、マレーシア、タイ、英国から計35名の参加がありました。開催挨拶では、上田崇仁副会長より日本語教育史の授業で学生から寄せられた近代歴史に対する気づきのコメントが紹介され、本シンポジウムの発表と討論の方向性を確認することができました。基調講演では、田中寛会長が「産業人材育成と日本語教育の真価―タイ国、TPA設立50周年記念式典に参加して」という演題で、タイにおける日本語教育の展開を通じて、日本語教育に関わることでアジアを見る目やアジアの中の日本を理解する姿勢などについて広く深く考える経験について話されました。その後、6名の研究者による研究発表が行われました。酒井順一郎氏の「ジェンダーからみた善隣回民女塾と是永章子・俊子」では、戦前に二人の日本人女性が大分県から朝鮮、蒙疆連合自治政府の張家口へと渡った経緯、女塾で行われた教育内容について解明するとともに、二人への評価について考察しました。山本一生氏の「日本戦争期青島の小中学校の日本語作文」では、使用日本語教科書について調査し、山口喜一郎の直接法に対して実際に行われていた教授方法について明らかにするとともに、学生の作文から「何が学ばれるのが望ましかったのか」について考察しました。朴仁哲氏の「朝鮮人「満洲」移民の戦争体験に関する考察―移民体験者の戦争の記憶を中心として」では、日本・韓国・中国をフィールドに収集した証言の中から4名を取り上げて紹介し、個人が歴史を通過することで植民地体験・戦争体験が複雑に絡み合っていることを指摘しました。徐雄彬氏の「偽満洲国と植民地朝鮮の小学校日本語教育体制の特質―「在満朝鮮人」学校に見られる両植民地の教育体制の縮図を手がかりとして―」では、日韓併合から日本敗戦までの教育内容・質・教授法などへの分析を通じ、「在満朝鮮人社会」が形成された中国東北において植民地朝鮮の延長線として日本による教育が行われていたことを解明しました。檜山純子氏の「金子光晴「マライの健ちゃん」と南方特別留学生オマールの夢　マレーシアジョホル州より」では、金子光晴の著作活動とマレーシアにおける戦争の歴史の記憶を継承する活動や歴史教科書などから、金子の民衆に対する深い同情と現地の人の視点で物事を捉えることに長けていたことなどを考察しました。松永典子氏の「平和共存をめざす日本語学習と歴史学習の統合可能性―言語・文化と歴史との関連付けを手掛かりに―」では、直接的に戦争を題材としにくい日本と批判的考察を語るのがタブーとされるマレーシアにおいて、歴史題材の内容をどのように思考に繫げるか、また多角的視点や、課題解決の限界などについて日本語教育の実践事例から考察しました。最後に「「海を渡った日本人教師」とその後」と題した討論では、現在日本に来ている人に対する日本語教育と共生について提議があり、母国の教育や文化というバックボーンを持つ者が新たな思想を打ち立てられるか疑問であるという意見や、研究者自身が研究活動を通じて自分の立場を自問した経験、日本の歴史問題に対して立場の違いから研究者同士の認識に共通点が少ないこと、教育者側として日本語教育だけでなく複数の専門の教員が一緒に関わっていることなど、各国の参加者から様々な見解が語られました。閉会の挨拶では、酒井順一郎事務局長より、私たちを取り巻く環境はAIの例のように著しく変化しており、何を学んでいるのかを考える際に共通のものも異なるものもあることを念頭に置き、ポストコロナ時代の新しい知の統合のありかたを提起されました。

　なお、『新世紀人文学論究』第7号の刊行および本研究発表＆シンポジウムの開催は伊月知子会員のPSPS科研費（20K00727）基礎研究（C）「『満洲国』の日本語教育が戦後中国の日本語教育に与えた影響に関する研究」の助成により実施しました。また、今回の研究発表者の複数名は科研費にもとづく研究成果の発表であり、本研究会の学術水準を示しています。次回も引き続き、研究成果の発信を心がけていきたいと思います。ご支援、ご指導のほどをよろしくお願いいたします。

＊発表題目等に誤りがありましたらお手数ですがご一報ください。